報道発表資料

平城京左京六条三坊
発掘調査

奈良県立橿原考古学研究所

令和８年 11 月 4 日

１．調　査　地	奈良市八条二丁目・大安寺三丁目
２．遺跡名（番号）	平城京跡（05C-0094）
３．事　業　名	（仮称）奈良 IC 周辺整備補助街路事業（西九条佐保線）
４．事 業 者 名	奈良県幹線街路整備事務所
５．調 査 期 間	2026 年７月 16 日～継続中
６．調 査 担 当	調査部調査課　課　　長　本村充保 調査第一係長　北山峰生 主任研究員　小泉翔太（現場担当） 主 任 技 師　西浦　熙（現場担当） 主 任 技 師　伊東　菜々子（現場担当）
７．調 査 面 積	約 4000 ㎡
８．主 な 遺 構	六条条間南小路および南北側溝、東三坊坊間西小路および東西側溝、溝、掘立柱建物、井戸
９．主 な 遺 物	土師器、須恵器、瓦、土馬
10．要　　旨	1・2 区を通じて六条条間南小路を検出し、2 区では六条条間南小路と東三坊坊間西小路の交差点を確認した。また、1・2 区ともに左京六条三坊六坪の宅地部分では、奈良時代後半（8 世紀後半頃）を主体とする小規模建物群や井戸等が展開することが明らかとなった。本調査により、平城京の南東部における条坊の設計・施工や、宅地利用の具体的な状況をうかがうことのできる成果を得た。
11．現地説明会	2026 年 11 月 7 日（土）10:00～14:00（小雨決行） 周辺に駐車場はありません。

はじめに

本調査は、（仮称）奈良 IC 周辺整備補助街路事業（西九条佐保線）に伴う、2026 年度の発掘調査である（図１）。今年度は平城京左京六条三坊の 3 か所で発掘調査を実施している（1～3 区）。調査地は、奈良市八条二丁目（1・2 区）・大安寺三丁目（3 区）で、調査面積は、1 区：2200 ㎡、2 区：1400 ㎡、3 区：400 ㎡である。

平城京は、平城宮から南に延びる朱雀大路を軸に、東西方向および南北方向の条坊道路によって「碁盤の目」状に整備されている。京内には、東西の市と運河（堀川）、貴族・役人の宅地、寺院などが展開する。京域は、外京を含めると東西約 6km、南北約 7km におよび、当地は「大和青垣」の山々から続く丘陵と、大和川へ流れ込む大小の河川によって形成された河谷・氾濫原により起伏に富む地形環境であったことがうかがえる。現況では本調査地周辺は低平な沖積平野で、西側に北東から南西に流れる佐保川があり、南側には東の山地から西流して佐保川に合流する岩井川・能登川が通る。本調査地の標高は約 57m で、平城宮大極殿（標高 71m）や東大寺大仏殿（標高 100m）との比高は数十mにおよぶ。

本調査地の東側には史跡大安寺旧境内が所在し、継続的な発掘調査により寺域の状況が明らかにされている。また近年、本調査地の周辺では京奈和自動車道の建設や JR 関西本線高架化・新駅建設に伴う発掘調査等により、平城京左京南西部における調査成果の蓄積が進んでいる。それらによると、五条大路以南では小規模な宅地割が多いことがうかがえ、五条大路以北にみられるような大規模な宅地が集中する様相とは異なった都市景観であったことが明らかになりつつある。

主な調査成果

平城京の条坊復元では、１区は左京六条三坊六坪、六条条間南小路、２区は同四・五・六坪、六条条間南小路、東三坊坊間西小路にあたる。調査の結果、**1・2 区ともに奈良時代の平城京に関わる遺構を多数検出**し、奈良時代に造営されたとみられる条坊道路および宅地を確認した（図２・写真１）。

条坊道路は、**約 150mにわたって六条条間南小路を確認**した（写真２）。隣接する 2025-2 区・2023-4 区や、（仮称）奈良 IC 建設に伴う発掘調査 13 区の成果を合わせると、延べ約 270m もの条坊道路を発掘調査によって確認したことになる。道路部分の幅は、南北の溝心々間距離で約 6mである。道路側溝は、断面形状や埋土の状況から施工時の幅は 1.0～1.2m程度と想定され、深さは 0.4～0.8m を測り、良好な遺存状況を示す。

２区では、**六条条間南小路と東三坊坊間西小路の交差点**の南半を検出した（写真３）。ここでは、六条条間南小路の南側溝が、東三坊坊間西小路の道路部分を横断することが明らかとなった。都城造営に際し、道路側溝の集水・排水機能を企図した施工がなされていたことを示す具体事例の一つといえる。

1・2 区とも、六条条間南小路の北側に、道路側溝とは異なる東西溝を検出した。また、１区ではこの東西溝と六条条間南小路の北側溝をつなぐ暗渠を検出し、暗渠には底部を欠

いた土師器甕３個体が土管状に連結された状態で埋置されていた（写真４）。したがって、この東西溝には**宅地の南端を画する区画溝**であるとともに、**宅地内の環境維持も企図した排水溝**としての性格も想定される。

左京六条三坊六坪の宅地内では、掘立柱建物や井戸等を検出した（写真５～７）。建物は2×3 間程度の小規模なものが多い。建物の分布には疎密があり、井戸も各建物群に組み合うように配置されていることから、これらが坪内の小区画を反映している可能性がある。建物の重複は顕著でなく、坪内地割の大きな変更もみられない。

条坊側溝などから出土する遺物は、奈良時代後半から平安時代初頭（8 世紀後半～9 世紀前葉）がほとんどで、奈良時代前半のものは少なく、平安時代以降の遺物もごくわずかである。したがって、当地周辺では奈良時代後半になって土地利用が本格化したものと想定され、平安遷都以後には都市としての性格はほぼ失われたと考えられる。

出土遺物には土師器・須恵器といった日用什器を筆頭に、近接する大安寺（およびその前身である大官大寺）で用いられた軒瓦なども散見される（写真８）。また、条坊側溝内からは土馬の破片も複数出土している。

まとめ

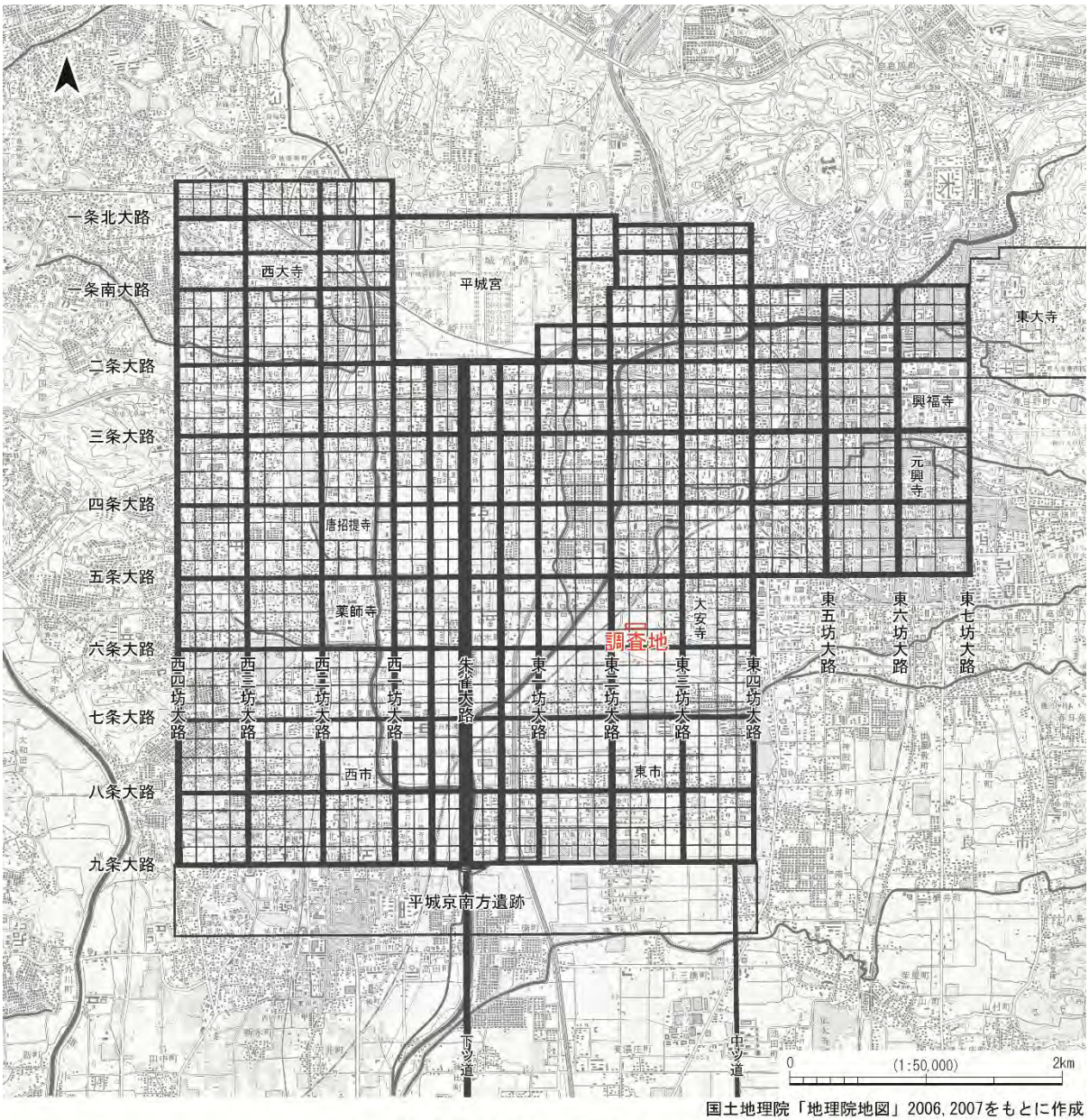
本調査では、平城京左京六条三坊の宅地および条坊道路を面的に検出したことで、平城京左京南西部における土地利用の状況をうかがうことのできる成果を得た。

具体的には、六条条間南小路の道路・側溝の規模が判明したほか、六条条間南小路と東三坊坊間西小路の交差点では、六条条間南小路の南側溝が、東三坊坊間西小路の道路部分を横断していた。周辺の調査事例でも、六条条間南小路と東三坊坊間路の交差点北側、および六条大路と東三坊坊間路の交差点南側で、同様に東西方向の側溝が南北の道路部分を横断することが判明している。本調査地周辺の地形は東から西に傾斜し、西側には佐保川が南北に流れていることからみて、この付近では道路側溝に流れ込む雨水等が西に向けて流出するよう計画的に設計・施工されていたものと考えられる。

また、左京六条三坊六坪では、奈良時代後半（8 世紀後半頃）から小規模建物を主体とした宅地利用が展開し、平安時代初頭には廃絶することが明らかとなった。調査地の東側に隣接する、平城京左京六条四坊・七条四坊に 15 町の寺域を占める大安寺は、716 年（霊亀 2）には造営（移建）が進められたとされるが、奈良時代前半には当地周辺では宅地利用が進んでいなかったと考えられる。いっぽうで、奈良時代後半（8 世紀後半頃）の宅地には、区画と排水を企図した溝が敷設され、坪内が小区画に区分されるなど、一定の計画性を見て取ることができ、都城の造営が長期にわたって計画的に施工されたものであった可能性がうかがえる。

同事業にかかる発掘調査は、2017 年度から継続的に実施しており、平城京左京四条三・四坊から左京六条三坊まで断続的に調査をおこなっている。また、本事業の南側に続く奈良市教育委員会による発掘調査や、西側の京奈和自動車道建設に伴う発掘調査など、大規模な

調査が数多く進められている。本調査の成果は、これらの調査で推定されていた平城京左京南西部における都市景観をより鮮明なかたちで示しているものと考えられる。今後、より詳細な都城の姿や人々の暮らしの実態解明が期待される。



国土地理院「地理院地図」2006, 2007をもとに作成

図１　平城京の範囲と調査地[1：50,000]

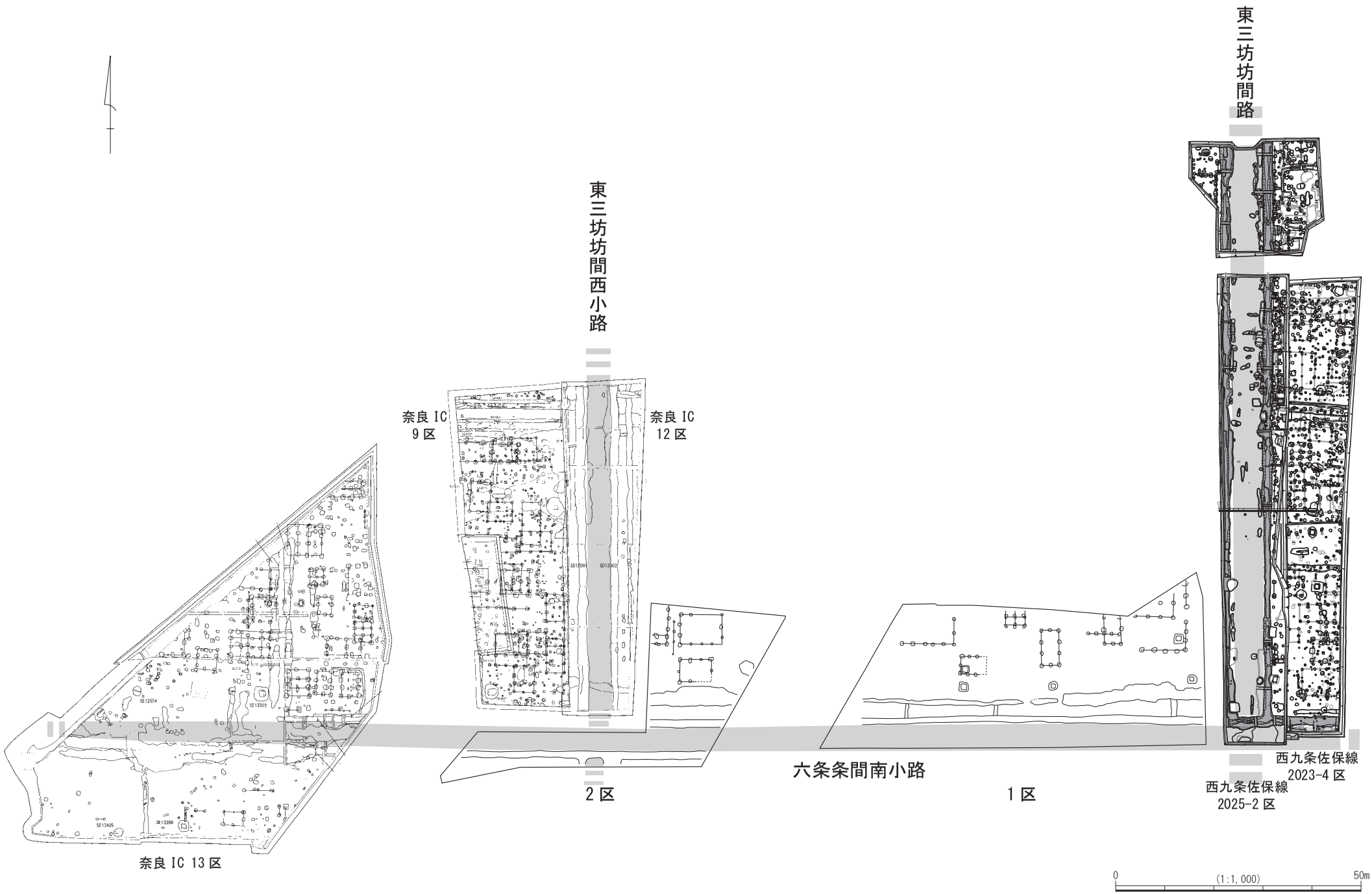


図２　2026 年度１・２区　主要遺構配置図および周辺調査区平面図（S=1/1,000）



写真１　１・２区　調査地全景（東から、手前が１区、奥側が２区）



写真２　１・２区　六条条間南小路　検出状況（西から、手前が２区、奥側が１区）

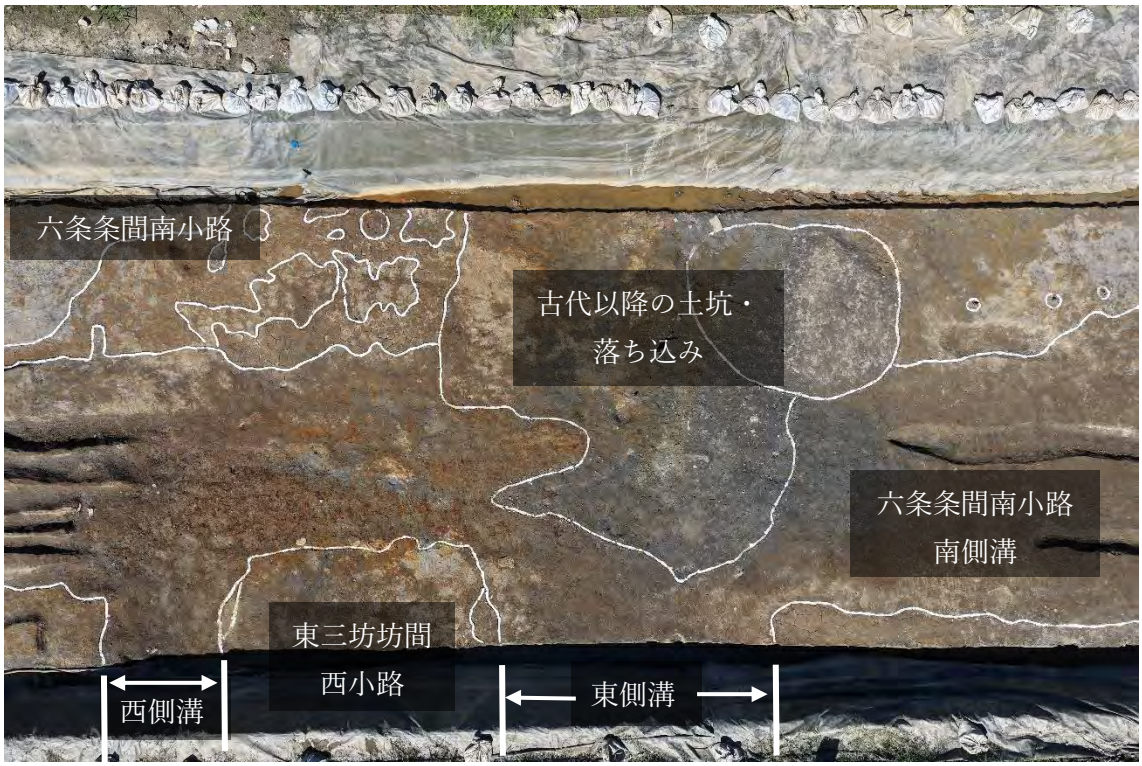


写真３　２区　六条条間南小路・東三坊坊間西小路　交差部分　検出状況（上が北）



写真４　１区　暗渠　検出状況（南東から）

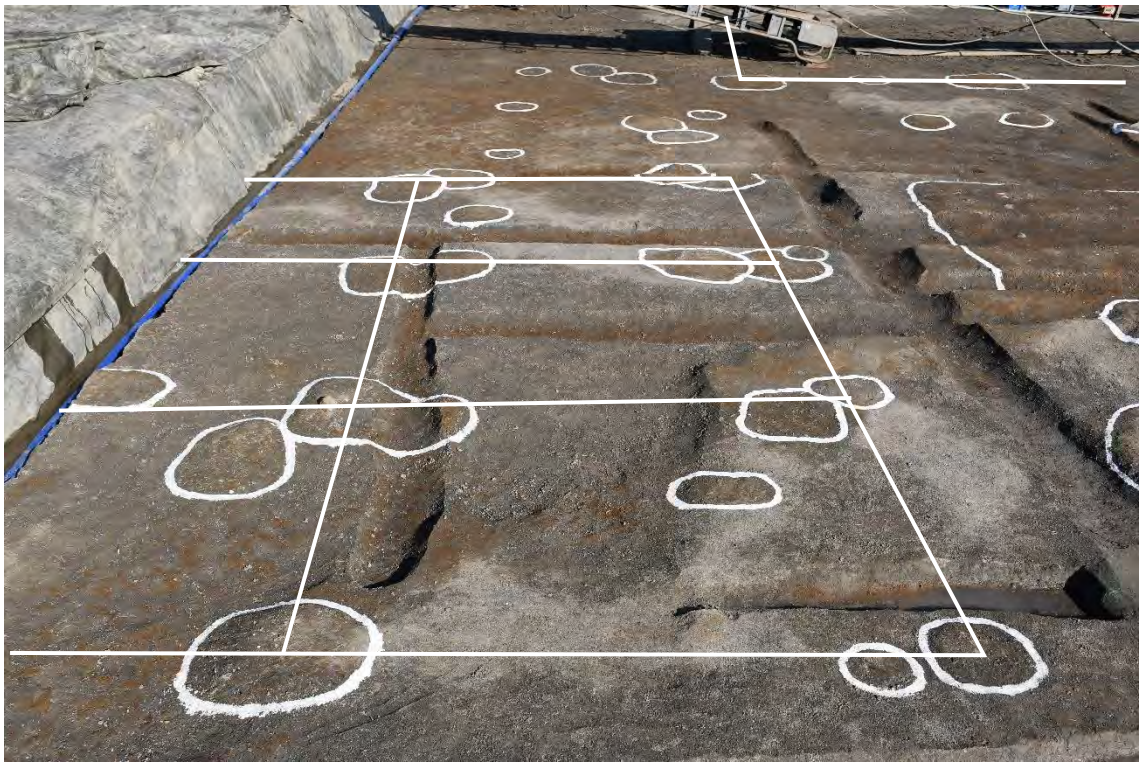


写真５　１区　掘立柱建物　検出状況（西から）



写真６　２区　柱穴群　検出状況（東から）



写真７　１区　井戸　検出状況（南から）



写真８　柱穴　軒丸瓦等出土状況（南西から）